

いつかやると思ってました。 by脳筋

ぱびこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ええ、ええ、いつかやると思っていました。だって何もしてないんですもん。そりやアタリますよね。ええ。正直、私にも分けて欲しいなーって思ってたんですけどね。え、違います？

——（脳筋）ウサミミ（拳闘士） 占術師

エイプリルフル用。いつかは消します。

目次

いつかやると思っていました。

b y 脳筋

いつかやると思っていました。 b y 脳筋

初めは、ちよつとした違和感でした。

あれは……そう、「ライセン大迷宮」を攻略し、「ブルツクの街」に帰ってきた時のことです。

「ユエさんユエさん、次はこっちはどうですか!？」

「ん、いいかも」

その時私は、ユエさん（私の師匠及び大親友）と一緒に、買い物を楽しんでいました。

大迷宮を攻略し、あとちよつとで次の街に出る、という時分で、呉服屋のクリスタベルさん（モンスタ―漢姉おねえさん）の挨拶ついでに、買い物をしていました。

ハジメさん、という私が狙っている男性のため、ユエさんと二人がかりで誘惑しようと画策していた時でした。

「……っ?!? んぐっ」

ユエさんがいきなり、口元を押さえかがみ込んでしまったんです。

もちろん、私は駆け寄って背中をさすって、クリスタベルさんにお水を持ってきていただきました。

「大丈夫ですか、ユエさん?」

「……………ん、大丈夫」

その時はすぐに治ったので、あまり大ごとにはなりませんでしたが、ハジメさんに話すこともありませんでした。

思えば、これが始まりだったのでしょうか。それからちらほらと、おかしなことが起こり始めたんです。

【北の山脈地帯】での事です。

私達は貴族の方ウィルさんの捜索の依頼を受け、【北の山脈地帯】に行っただんです。その時はハジメさんの恩師の方と、同郷の方々を連れて。

その時、テイオさん（何もなければいい人）と戦ったんです。その

時、テイオさんは洗脳されていて、ハジメさんと私たち三人で応戦したんです。

ご同郷の方々に力を見せつけるための戦いでもあったのですが……その時、事件が起こったんです。

ユエさんが先制に魔法を放った時、それは起きたんです。

「〱禍天〱」

その宣言は、テイオさんを押し潰さんという(その時は敵でしたし)覇気が込められていました。

ですが、何も起こりませんでした。

私たちもちろん驚いていましたが、一番驚いていたのはユエさんだったと思います。当然、そんな隙を晒せば相手が放っておくわけないもので、ユエさんは格好のマトになっていました。

そうはさせじとハジメさんがテイオさんの側頭部を撃ち抜いて、なんとか標的をハジメさんに向けさせたうちに、驚愕に顔を呆けさせたユエさんを抱え、なんとか離脱させることができました。

その後、テイオさんの変態が発覚して帰路に立つ時、虚空に闇色の玉が現れ、空に向かって飛んでいくのが見えました。どうやら、先程放った魔法が遅れて発動したそうです。

あの時は「調子が悪かったんだな」とハジメさんに撫でられ、ご満悦なユエさんに「わざとやったのでは?」とか、嫉妬の感情が芽生えたものですが……一体、何が原因だったのか、その時はわかりませんでした。

最後は、フューレンに戻る道のりでの事でした。

洗脳が解け、ハジメさんの奴隷となった(例えですけど、本気で思っている)ので、テイオさんの歓迎会を開いたんです。

ハジメさんやユエさんは乗り気ではなかったのですが、せっかくですし、ということとで私が腕によりをかけてご飯を作ったんです。

ウルの街で頂いたお米をどう調理しようか、と考えながら、ご飯を炊いていた時です。その時ふと、ユエさんが様子を見にきたんです。どうやら、お腹がとても空いていたそうで、私は小腹に挟む程度なら、

とお菓子を渡しておいたんです。ちよつと酸っぱめな飴玉なんですけど。

それを美味しそうに食べる側で、ご飯を炊いている鍋の蓋を開けたんです。

その瞬間、ユエさんが一気に青ざめました。

まるで、何か気持ちの悪いものを口に入れたような顔をして、走っていったんです。その時はちよつとショックでしたね。なにせ、自分の料理にあんな顔をされるとは思いませんでしたし……ええ、本当に。

その時は飴玉が不味かったんですかねえ、と自分を納得させました。結局、作り終えた後は食べてくれたみたいですし。

まあ、流石に……それで気づかないわけがなかったんですが。

そして、今日。

私——シア・ハウリアは、今までのことを思い出して、空を見上げた。

思い出せば、兆候はありました。

最初は少しの違和感でも、たくさん。一回限りは偶然でも、何回も起こればそれは必然になる、なんてことも忘れて。

ユエさんは今日、どこかおかしかった。

朝からソワソワ。昼にはオロオロ。そしてどこかへふらつと行つたと思えば、ドキドキした様子で忙しない。

これからハジメさんのご同郷の方々に会いに行くというのに、ユエさんは朝から落ち着きがなかったんです。まるで、秘密を隠す乙女のように、じつとしていなかったんです。

「のう、シアや。これはどうするんじや?」

「あつ、ティオさん。それは持っていつてもらっても大丈夫ですよ」

もう日が落ちかけていた頃。ティオさんに手伝ってもらいながら、

夕飯の準備をしていたところです。

いつも通り、自製アーティファクトの手入れや創作を行なっているハジメさんに、ユエさんが近づいて行ったんです。

「ハジメ」

「お、どうした。ユエ」

ハジメさんはユエさんを（いつものように）抱き寄せ、膝に座らせていました。

「ちよつとハジメさん！ もう、ユエさんばかり抱きしめて！」

「羨ましいのう、ハジメや。妾も……」

そんなハジメさんに構ってもらおうと、ティオさんと共に這い寄った時です。

「ハジメ」

空気が変わった。そう感じました。

明らかにいつものユエさんじゃない。

あからさまに雰囲気異なるユエさんに、ハジメさんは気圧されたようでした。そんなハジメさんの腕を押し除け（本当に珍しいことに）立ち上がりました。

呆然とするハジメさんをよそに、ユエさんは懐から一枚の紙を取り出し——私とティオさん私たちは、背筋が凍った。

それは、私たちが知っていたものだったからです。

むしろそれは、女として知っておかねばならぬもので。

女ならば、知らないはずがないもので——！

それが何を意味するかわからないハジメさんに、ユエさんはにっこり笑いかけて、こう言いました。

「——できちやった♪」

——空気が、凧いだ。

道理とか、真理とか、これからとか、そんなものを置き去りに落とされた最強の神代魔法ばくだんに、ハジメさんは——

「ばふおあ」

断末魔をあげて、崩れ落ちた。

——デスヨネー……

私の想いよ、闇夜に届け。

引き攣った顔を隠すように、そう、思った。